

・コロナ禍で人々の暮らし方とか働き方、価値観が大きく変わり、オンライン消費はさらに増えて仕事だけではなくて、健康とか食生活とか、家族とか趣味とかというところに人々の関心が向き、柔軟な働き方を志向する人が増えた。これを受けて、都市の在り方も大きく変わる。都心部といえども、不動産の優勝劣敗は劇的に進むと思われ、東京の都市再開発は明らかに転換点に差しかかったと認識している。東京都が主体的に都内の各エリアの色づけをして、方向性を、それぞれ別のユニークなエッジを立てる方向にリードすることが必要であり、起業家とかクリエイターとかアカデミア、あるいは先端的な生活者が集まるような都心の実験区を都内につくれないか、そこで異才とか異能たちが新しいいろんな実験を行い、それが起爆剤となって東京の産業革新につながっていくのではないかと提案している。

・大きな方向感として、一つは、リアルとデジタルがもっと融合した都市をつくらなければいけないということ。二つ目は、空間と時間が滑らかにつながる都市をつくるべきであるということ。具体的には、職住遊が融合している都市、昼間と夜が境目なくつながっている都市である。そして三つ目に、もっと豊かな風景を大切にしたい都市づくりが必要。

・creative&innovative から考えると、多様性とセレンディピティを起こせるような場をつくっていくことが重要になる。先行事例として、秋葉原のDMM.make AKIBAのように、ハードウェアとソフトウェアとクリエイティブの掛け合わせができている企業が生まれる多様なコミュニティが交差するような場である。

・『Monocle』のQuality of Life Survey では2017年までは東京が3年連続で一位だった。この指標の興味深い点は、「クラブが何時まで開いているか」、「独立系の本屋が何軒あるか」ということも文化度の指標と看破しているところ。また、匿名性がある、ロマンスがある、刺激的で面白い人たちが集まるようなイベントやパーティーなどがあるということも文化度の高い都市として重要。これは東京都への二つ目の提案と関連するが、仕事と住生活と遊

ぶことが、どれだけ滑らかにつながっているかは、都市の文化度の重要なポイントであり、昼と夜の境目がないことも重要である。

・ナイトタイムエコノミー推進協議会で取り組んでいるのは、夜間の文化及び経済の活性化。最近取り組んでいることの一つは、観光庁のナイトタイムエコノミー事業の選定と、コーチング支援。二つ目は、夜間の文化価値を定性的に調査する Creative Footprint。三つ目は、関連産業に関するロビーイングであり、ライブエンターテインメント産業が新型コロナの影響で壊滅的な打撃を受けた中で業界の救済策を政府に駆けあつたりしている。

・ナイトタイムエコノミーは、もともとは、風営法の改正から始まったが、この2年間、観光庁の予算を活用するかたちで取り組んでいるコンテンツは、音楽だけでなく、美術館や博物館の活用など様々なものがあり、夜を切り口にした地方創生プロジェクトそのものでもあるというふうに感じている。コーチング支援は、予算がなくても自前で、その地域のチームの人たちが運営していけるような運営のオペレーションまで作り込むところまでいって、初めてこの事業が完結する。そのために必要なのは、体制をつくること、それから事業としての計画も、やり方を学んでいただくこと、制作物をつくって来年以降も使えるようにすること、それからオペレーションのノウハウの体系をつくること。そのためのサポートを行っている。

・今年度、特に注力しているのは、一つ一つのエリアの本質的な価値をもう一回見直すこと。本質的な価値を今年だけではなくて、来年以降に向けてちゃんと磨き上げて、それを適切に伝える、ある意味で、訓練の年にしようという事業を行っている。

・ナイトタイムエコノミーでもう一つ取り組んでいる活動は、昨年実施した Creative Footprint TOKYO という夜間の経済価値を定性的、定量的に評価する調査事業。Creative Footprint は、もともとベルリンで始まり、そのあとニューヨークで実施、東京が3都市目の調査。ウェブで Creative Footprint TOKYO というふうに検索すれば、日本語版、英語版の両方のレポートが出てくる。この調査でやろうとしていることは、都市の文化力を図ろうということ。都市の文化力を高めると、クリエイティブ・コミュニティが成功する。具体的には、

観光と文化と都市、この三つのコミュニティからの有識者のインタビューをし、ナイトタイムエコノミーや文化の拠点になるミュージックベニューの定量的な調査をして、観光、文化、都市の関係者が集まってワークショップを行い、この三つのクラスターをつなげる取り組みをした。

•このような定性的、定量的な評価を踏まえて、ナイトタイムエコノミー協議会では、政府、東京都、ディベロッパーの皆さんに提言を行っている。提言の一つ目は、分野横断でステークホルダーの協働をさらに活性化する必要があること。文化セクターと観光セクターとまちづくりセクターがもっと緊密にコラボレーションをしましょうということ。これは政府の中でも同じことが言えて、文化庁と観光庁と国交省がもっといろんなかたちで緊密に政策の連携をしていただけませんかをお願いをしている。

•二つ目は、新しい文化を生み出していくクリエイティブコミュニティを追い出さず、その人たちが街の中にとどめるために、街中に余白をつくっていく必要があること。ストリートや公開空地をもっと有効活用できるようにするとか、ポップアップの店舗で若いクリエイターがいろんな表現を試せるような場をつくるなどもう少しクリエイティブな政策的な取り組みも必要になる。

•三つ目は、人材育成と人材交流。いいクリエイターはたくさんいるのにクリエイティブプロデューサーが足りないのが日本の文化コミュニティの最大の弱み。ビジネスとして成立させて、サステイナブルなものとして続けていく上での指南役、クリエイティブのわかるビジネスプロデューサーをどう育成をしていくかがエリアマネジメントにおいても重要な課題である。また、マイノリティの人達が活躍できる施策や、深夜交通の充実なども提案している。

•街の価値を上げる、これは投資そのもので、エリアマネ自体が独立採算で赤字にならないように頑張りますという話ではないと考えている。不動産会社も自治体も、この点の発想を転換し、エリアマネジメントに投資をして、街の価値を上げて、別のところで回収するという発想で取り組んでいけば日本中の街がもっともっと魅力的になるのではないかと。